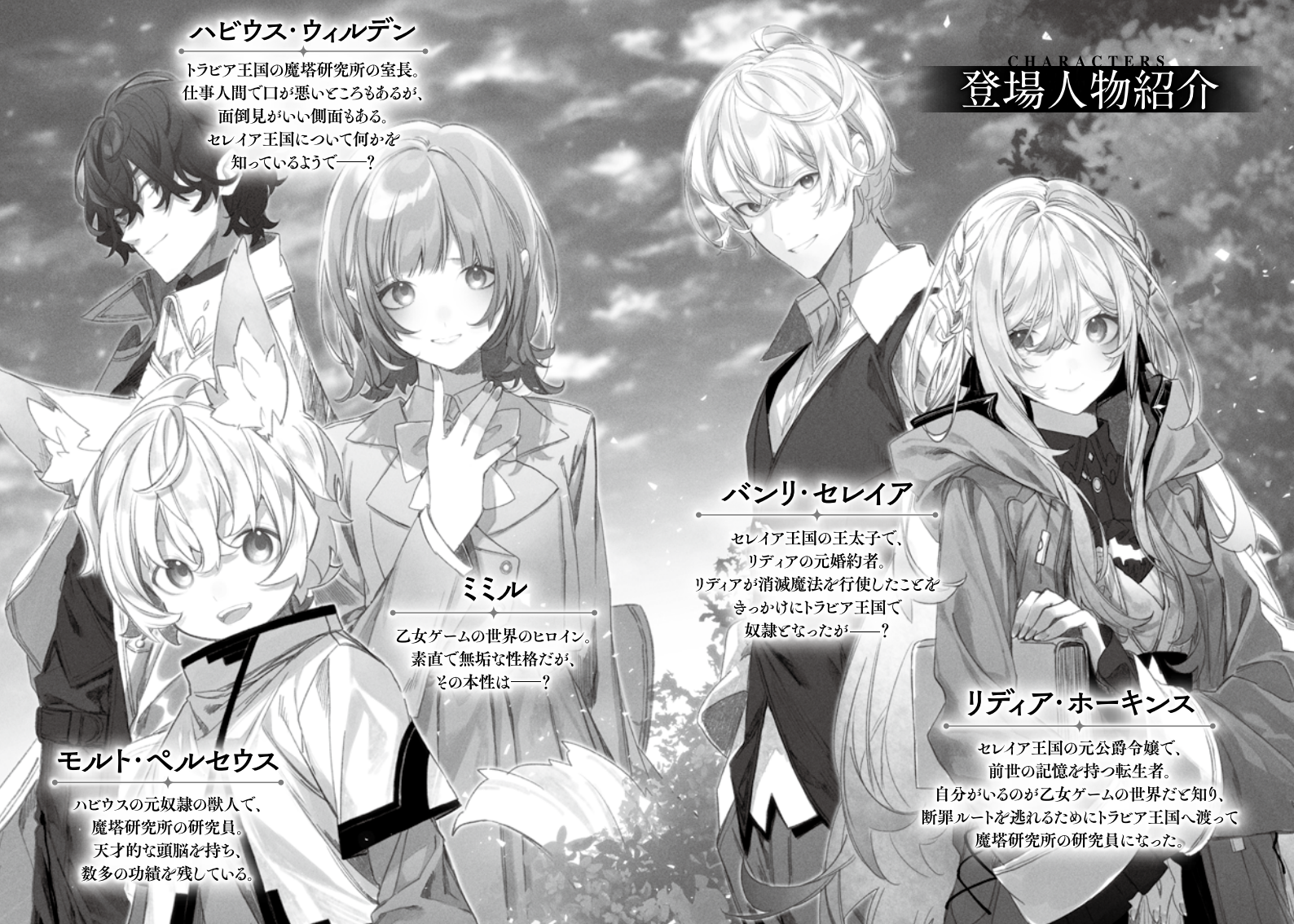
# 消滅した悪役令嬢

マロン株式
Maron Kabushiki

Regina BUNKO



CHARACTERS

# 登場人物紹介

## ハビウス・ウィルデン

トラビア王国の魔塔研究所の室長。
仕事人間で口が悪いところもあるが、
面倒見がいい側面もある。
セレイア王国について何かを
知っているようで――？

## ミミル

乙女ゲームの世界のヒロイン。
素直で無垢な性格だが、
その本性は――？

## モルト・ペルセウス

ハビウスの元奴隷の獣人で、
魔塔研究所の研究員。
天才的な頭脳を持ち、
数多の功績を残している。

## バンリ・セレイア

セレイア王国の王太子で、
リディアの元婚約者。
リディアが消滅魔法を行使したことを
きっかけにトラビア王国で
奴隷となったが――？

## リディア・ホーキンス

セレイア王国の元公爵令嬢で、
前世の記憶を持つ転生者。
自分がいるのが乙女ゲームの世界だと知り、
断罪ルートを逃れるためにトラビア王国へ渡って
魔塔研究所の研究員になった。

# 目次

消滅した悪役令嬢　7

書き下ろし番外編
リディア十二歳の誕生日に乱入してきた獣人の幼児　347

消滅した悪役令嬢

## プロローグ

前世、私は地球にある日本という国で研究員をしていた。
しかし、研究所で起きた事故に巻き込まれて死んだ。
そして次に目を覚ました時、前世の学生時代に嗜(たしな)んでいた乙女ゲームの悪役令嬢――
リディア・アルレシスとして転生していたのだ。
リディアは悪役令嬢として王太子に断罪されるキャラクターだ。
その未来を回避するために私は幼い頃から動き出していた。
だが、思惑通りには進まず、わかっていたのに、私はあっという間に王太子を好きになった。
婚約者として関係を深めていった私達。
ゲームの関係とは違い、私達は本当の婚約者同士だった。



――けれどもそうやって積み重ねた信頼や期待、そして希望も、学園に入学して間もなくして少しずつ砕け散っていく。

ああ、一体どうしてこんなことになってしまったのだろう。
やり直せるとしたら、彼と出会わなかったら……
光に包まれながら、私は今までのことを思い返していた――

# 第一章　公爵令嬢消滅前

乙女ゲームに登場する公爵令嬢リディア・アルレシスは、いわゆる悪役令嬢といわれるキャラクターだった。

彼女は王太子に一目惚れし、宰相（さいしょう）をしている父の強い後押しで半ば強引に婚約者の地位を得た。

それからというもの、王太子に近づく令嬢に目を光らせ、時には非道な方法で邪魔な者を排除していく。王太子から再三の忠告を受けたが改善することなく、学園に入学する頃には愛想をつかされてしまうのだ。

最後はヒロインの命を狙ったことがきっかけで、今までの悪事を白日（はくじつ）の下に晒され、王太子に処刑を言い渡される。

その未来が初めからわかっていた私は、最初から王太子の婚約者にならないようにしようと考えた。断罪を回避するには、国を出ることが一番確実だ。

準備を進め、そろそろ隣国へ行こうかと考えていた八歳の頃。



王宮からのお茶会の招待も受けず、不敬にならない程度に王家と関わるようにしていた態度が逆に目についてしまったのか、ある日突然王太子との見合いの席が設けられて、あれよあれよという間に婚約者の地位についてしまったのだ。

王太子の名はバンリ・セレイア。

彼は乙女ゲームのメインヒーローだ。

乙女ゲームでは、王太子と悪役令嬢は見かけだけの婚約者であった。

一途に王太子を想うリディアと異なり、王太子は政略結婚の相手として割り切っており、必要以上の関わりを持たずにいた。

ヒロインの登場によりその関係は壊れ、王太子の手によって断罪が進められる。

けれど、私の予想に反して、学園に入学するまでの数年間で、私とバンリは見かけだけの婚約者ではなくなっていた。

私は、婚約者として彼と定期的に会ううちにどんどん心惹かれて、離れ難くなっていったのだ。

その感情はゲームの強制力によるものじゃないかと不安になることもあったけれど、悪役令嬢を初めから嫌っていたゲームの中の王太子とは違って、私が見てきた彼は初めから優しくて、穏やかで、熱を含んだその瞳がいつも私を好きだと物語っている気が

した。
王太子に促され愛称で互いを〝リディ〟〝バン〟と呼ぶようになり……
民のお祭りに紛れたり、貴族の遊び場でデートしたり、会えない時は手紙を送りあったり、一緒に勉強したりと、沢山の思い出を積み重ねていくうちに不安は鳴りを潜めてゆく。
そうして、十二歳の冬には二人きりになった公爵家の書庫で、結婚式の真似事のような言葉を互いに誓うと、どちらからともなく口付けを交わした。
バンとは間違いなく互いを想い合う関係を築けていた。
加えて別の攻略対象のルートで悪役令嬢となるクラリス侯爵令嬢、レストン伯爵令嬢、ディンバル子爵令嬢をはじめ、幾人もの信頼出来る友人が出来た。
そして、ゲームでは仕事人間で家庭を顧みなかった父とも良好な関係を築けたので、万が一乙女ゲームの強制力が働いて不当な断罪をされたとしても、きっと最後まで私を信じ、味方をしてくれるだろうと思えた。

――そのはずだった。



「リディア様、あの平民に嫉妬して嫌がらせをするのはおやめくださいませ」
学園生活が始まって一年が経過した頃、教室の中心で私に向かい声高にそう苦言を呈したのは、親友のアウロワ・クラリス侯爵令嬢だった。
クラリス侯爵令嬢の後ろには多くの友人達が控えており真剣な眼差しをこちらへ向けている。
私は彼女が言った言葉の意味をすぐには理解出来ずに固まった。
確かに三か月ほど前から、〝王太子と懇意にしている平民のミミルに嫉妬して私が嫌がらせを行っている〟とまことしやかに囁かれていることは知っている。
けれど、先日友人達はそのような噂をしている者達を一喝してくれていた。そんな彼女から出てきた苦言は、私にとって耳を疑うものであった。
「待ってください、私は本当に何もしておりません。〝常に人目に晒されている私にそのようなこと出来るはずもない〟と……。先日噂をしていた者達に述べてくださったのは他でもなくアウロワ様ではないですか」
「あの時は考えが及ばなかったのです。リディア様は公爵令嬢であらせられます。自分の手は汚さず、使用人に指示を出し嫌がらせを行うのは造作もないことではありませんか」

「……っ、そんな、私がそのようなことを本当にすると？　アウロワ様は本当にそう思うのですか？」

私の問いかけに、クラリス侯爵令嬢は返事を返さず、出会ったばかりの頃に見た敵に向かい合う姿勢を崩さなかった。

しかし、その瞳はどこか悲しみを宿していた。

後ろに控えるレストン伯爵令嬢、ディンバル子爵令嬢も、決戦を迎えたかのように、強張った表情をしながらも真っすぐに私を見ている。

「証言者がいるのです。指示内容を記載した手紙と共に私達の元へ勇気を持って真実を告げに来ました」

この日、教室の中心で起こった出来事は学園中に広まった。

今まで私の味方だという姿勢を貫いていた令嬢達が、証拠を持って私を糾弾したのである。

あまりに唐突なことで動揺してしまい、幾つかあった疑問点についてもその場で追及することも出来ず、無実を証明することも叶わなかったのだ。

それから数日が過ぎて、誤解だと伝えるために話し合いをしたけれど、むしろ彼女達の私への心象は悪くなるばかりで。



その問答を多くの生徒に見られたことで、親友にすら見切りをつけられていると囁かれ、周囲の状況はさらに悪化した。

少し前から、学園の様子がおかしいとは思っていたけれど、令嬢達とは揺るがない信頼関係が築けていると信じて疑わなかった私は、ただ動揺するしかなかった。

そして、あることに考え至る。

「――まさか。ゲームの強制力が働いているの？」

この世界でゲームの強制力が働くことを懸念しなかったわけではないけれど……、いいえ、そんなはずはないわ。まさか。

――これが。強制力なのだとしたら、人の心にまで作用してしまうということだ。そんなのはあり得ない。もしそうだとしたら、私に打つ手など……ない。

ふと、バンリの顔が過って、彼のいる教室へ向かおうと足が急いだ。

すると、窓の外に遠目ながらバンリを見つけ、その前にいるミミルと談笑して笑っている姿が目に入る。

「強制力なんて……あり得ない」

しかし、この時胸に抱いた嫉妬心は、自分でも驚くくらいに大きくて、廊下でそっと胸を押さえた。

大丈夫。だって、バンは小さい頃から私の側にいて、一緒に育ってきた。

だから、彼が私へ向ける眼差しはいつも、愛情のこもったもので、図書室で口付けを交わしたこともある……

（でも……学園に入学してからは二人の時間を殆ど取れていないわ。クラスも違うせいで尚更……）

バンは入学してから、クラスメイトとの交流を大事にしていた。学園唯一の特待生だからか、ミミルへの配慮を手厚くしているようだったけれど、それは仕方のないことだった。

この学園は少し前まで貴族の子息子女のみが通っていた名門校。未だに平民に対する差別が残っていると聞く。

だから、正義感の強いバンリが彼女を気にかけることは不自然なことじゃない。

――本当に、そう思っているの？　バンが女性への距離感を間違えるなんて初めてなのに？



心の中の不安を打ち消すように、首を横へ振って、頬を叩いた。

きっと、今は友達の間でも孤立して、誤解されてしまったからこんな風に考えてしまうんだわ。

私は、自分を奮い立たせるように、目の前の光景から背を向けるべく踵（きびす）を返した。

◇

数日後――学園での誤解は解けないまま、護衛を二人連れて市井（しせい）へ視察に来ていた。

私は幼い頃から、正体を隠して度々このようなことをしている。

前世の知識を生かして、アルレシス公爵家の財政を豊かに出来たとはいえ、未だに行き届いていない貧困地区は存在しているし、領地に住まう者達の生活の質がどうなっているのか、直接目にしないことにはわからないからだ。

中でも、定期的に視察している孤児院へ向かう道中には、顔見知りとなった者が幾人もいた。

例えばいつも道端で音楽を奏でている少年。今日もその姿があったので、私はいつも

通り近づき、心地よい音楽のお礼にお金を払おうとした。
「あんた、アルレシス公爵家の令嬢なんだって？」
「え？」
「学園じゃ平民にとんでもない仕打ちをしているらしいな。それなのに俺に施しをするって、本当はどんなことを企んでるんだ？　腹の中で、金に媚びへつらうガキだと馬鹿にしてたんだろ」
少年は「極悪人の金なんかいらねーよ！　馬鹿にすんな！」と吐き捨て、私が入れた小銭を足元へ叩きつけた。
驚いて目を瞬く私をよそに、少年は背を向けて帰っていく。
「公女様に何と無礼なっ」
同伴していた護衛が少年を追いかけようとするのを止めて、私はいつも通っているパン屋へと足を運んだ。
けれど、あんなに親しくしてくれていたパン屋の販売員にも、自分の正体がばれており、学園での極悪非道ぶりをなじられて門前払いを食らった。
（そんな……どうして、皆私の正体を知っているの？　何が起こっているというの？　本当に私が学園で酷いことをしていると、私が信用に値しないと判断されているの……）



――やっぱり、強制力が？
「違う。そんなの、絶対に違うわ」
もしそうなのであれば、私は――
大丈夫だと必死に自分へ言い聞かせながら道の先へと進み、孤児院へと到着した。
ここでは、いつも子供達が歓迎してくれる。私は来る度に絵本やおもちゃを差し入れるからだ。そして時間がある時は、子供達と一緒に遊ぶのである。
「帰れ！　悪女！」
大きな子供の叫びと共に飛んできた石は、護衛の者が防いでくれたけれど……
この時感じた胸の痛みと、空虚な穴は広がるばかりだった。

◇

「……一人になりたい」
アルレシス公爵邸に帰ってきた私は、皆にそう言い渡して、広いベッドに身を投じた。

あれから二週間が経ち、今はもう、何も考えられないほどに疲弊している。少し前まで、笑顔を向けてくれた人々が、自分に憎悪の感情を向けてくる。誰も私の言葉を信じてくれない。

それがどれほど辛いものなのか、私は知らなかった。

これが本当に、自分が犯した罪によるものだとしても、辛いものになっただろう。

（どうして皆、信じてくれないの？）

もしもこれが、強制力によるものなのだとしたら、私に打つ手など一つもない。

――ここから、この国から跡形もなく、消えるしか。

暗い考えが過った時、花瓶に生けている花が王室の庭園にしか咲かないものだと気がついた。バンリが送ってくれた花だ。

心が弱っているせいか、楽しい思い出が目の前に幻の如く見えた気がした。

目尻に溜まる涙を拭って、自らを奮い立たせるように拳を握りしめたその時――部屋の戸を叩く音がして、父の声が聞こえてきた。

「リディア、開けなさい」



いつもと違う怒りを孕んだ無機質な声のトーン。

いや、元々はこんな話し方をする父だった。私が生まれると同時に母が亡くなり、娘の扱いに困っていた父は仕事へ没頭して私から逃げるようになった。

悪役令嬢リディアの根幹にあるのは、愛情不足によるもの。

けれど、こちらからしつこいくらいに歩み寄り、時には喧嘩して対話を重ねたことで、父とはゲームとは違う良好な親子関係を築けていた。

そっと扉を開いた瞬間、パン！　と音を立て、強烈な衝撃が頬を捉える。

「おまえという奴は、家門の恥さらしめ。悔い改めるため、一週間反省部屋で過ごしなさい」

――ああ、私の居場所は、味方は、この家にもなかった。

◇

友人にも家族にも見放され、私は一人孤独を感じていた。

そんな時目にしたのは、バンの横で昼食を食べるミミルの姿。

――やめて、その場所は、彼の隣は私の場所なのに。

本当は、なりふり構わず大声でそう言って間に入っていきたかった。

だけど私はこれでも公爵令嬢で、そんなみっともないことをしようものならゲームの悪役令嬢のようになってしまう。

そんな私の視線に気付いたバンは言った。

「暫く、距離を置こう」

いつもの口調だけれど、私にはわかる。

彼は苦しんでいる。

私が、彼を苦しめている。

〝どうしたの？〟と問いかけても彼は〝何でもないよ〟とどこか苦しそうに答えるばかりで。

前世のゲームを知るからこそ湧き上がる不安と、周りの噂、バンの不自然な態度、ミミルと共にいる姿を見る度に信頼が揺らいでゆき、どんどん彼を諦めてゆく。

（これが、強制力？）



どうして？　と、詰め寄りたかった。

私の何が悪かったの？　そう問いかけたかった。

だけど、きっと私がそう言ったら彼はまた〝君は悪くないよ〟と言って苦しそうにするのだろう。

心を痛めるのだろう。

一時でも、私と婚約者として向き合ってくれていた彼だから。

そして私の中に、数年前中断したはずの計画を実行しようという思いが再燃していく。

この国で、死んだことにして、隣国に行くべきだと。

『リディ。君に永遠の愛を誓うよ』

それでも、子供同士の戯れ（たわむ）で交わした誓いが、私をこの国に縫い付けていた。

けれど、それをも打ち消したのもまた、彼の声だった。

「……謝るんだ、リディア・アルレシス……」

私がミミルを階段から突き落とそうとしたと、ミミルの取り巻きに責められていた時、現場に現れ周りに話を聞いたバンは、目の前にいる婚約者を見据えて咎めた。

だけど、本心では婚約者である私を皆の前で貶めたくはないのだろう。

周りから見た彼の表情は硬いままで、何の感情も表に出していない。でも私にはどこ

か苦しそうに言葉を紡いでいるように見えた。
それはそうよね、学園入学前に私と過ごした日々の中で貴方の眼差しはいつも愛を語っていた。
彼もきっと覚えているはずだ。
私と過ごした日々を。あの日の誓いを。
根拠もなく、婚約者である私ではなくミミルの味方になることに、罪悪感を抱かない彼ではない。そんなところを私は好きになったし、大丈夫だと思っていた。
（でも……彼は正気で、記憶を失ったわけでも立場が変わったわけでもない。だけど、ダメなのね。運命には逆らえないということかしら）
これ以上、私の記憶の中にいる彼を失いたくはなかった。
何か理由があるとしても耐えられなかった。
怖かった。ゲームの悪役令嬢のように、もう愛されていないとわかっていても縋りついてしまいそうで……それほどに愛してしまった彼に、決定的な言葉を言われることが。
最後に待ち受ける断罪シーン。
「婚約破棄する」と王太子に言われる未来が、愛しているからこそ、怖かった。
気まずさは感じているだろうにミミルのことを振り払わない彼の姿を見て、先程の言



葉を聞いて。ここが私の限界であることを悟った。
（……もう充分、わかったわ）
学園入学前に彼と過ごした日々は楽しかった。
私は一生に一度の恋だと思える日々を過ごせた。
出来れば学園生活を共に送り、将来王太子を側で支える王妃となりかったけれど、それはどうにも叶わぬ夢のようだから。

――私の存在が貴方を困らせているのなら、貴方の前から消えましょう。

バンが視線を逸らして片腕を握りしめ、何かに耐えているのが、私にはわかる。
でも、もう、いい。
所詮私達は政略結婚だ。彼がどんなに努力をしてくれたとしても、好きな人が出来てしまうのは仕方がない、好きな人の味方をしたいのもわかる。
私だって貴方が言ったことは疑わないもの。
この目で現実を見て、貴方の口から聞かなければどんなことでも無条件で信じたわ。
あの日の、誓いのように。

誰も悪くはない。私に悪いなんて思わなくて良い。
私と過ごした思い出が貴方を苦しめるなら、私は貴方の前から消えるから。
だから、最後は貴方が好きだと言ってくれた笑顔の私を覚えていてほしい。
そんな思いを込めて、私は柔らかく微笑んだ。その瞬間、彼は大きく目を見開いていた。
「さようなら。バン」
視界の端で、バンが私に向かって手を伸ばしたように見えたけれど、これも私の都合の良い妄想だろう。何にせよその時を境に私は何もわからなくなった。
視界が暗転し、顔の端や指先が光の粒となり消えていく。

――この日、セレイア王国、王太子の婚約者であるリディア・アルレシスは禁忌とされる消滅魔法を己に行使。光の粉となりその身は、跡形もなく消えさったのだとか。

数日後、消滅魔法により自害した、享年十四であるアルレシス公爵令嬢の葬儀が執り行われた。

## 第二章　隣国に召喚された公爵令嬢

俺の名はハビウス・ウィルデン。
トラビア王国でも屈指の天才が集まるという魔塔研究所の室長をやっている。
現在サボ……一服するために外でタバコをふかしていた。
最近人手不足で凄く困っている。魔塔研究所ではそれぞれが好きな研究をしている。だが、組織として当たり前のことで、研究の成果は勿論、収益を出すことを求められている。
それに加えて、たまにお偉い方からの注文で貴重なポーションや薬も作らなくちゃならない。
だが天才なんてそうそういるわけもなく。
今は、室長である自分以外で使える人材はあと二人程度しかいない。せめてあと一人いたら凄く助かるな……と考え煙を吐いていた。
（天才か……そういやあの少女は、今頃十四歳くらいか？）



数年前、隣国セレイア王国からやってきた公爵令嬢が魔塔研究所を見学したいと言い出した。
最初は貴族令嬢の道楽でただの冷やかしだと思っていたが……彼女が母国で研究していた薬を持ってきて、解説した時は驚いた。
試しに実験してみると、効き目がすぐに出る上に副作用も少ない。彼女は他にも完成された薬を幾つか提示してきた。
この時公爵令嬢はまだ八歳で、間違いなく天才の部類だった。
しかも、歴史上かつてないほど稀に見る天才。
だってそうだろう？　普通研究っていうのは失敗を何百回も繰り返し、やっと成功を掴むものなのに。彼女は初めから正解を導き出していた。
ダメ元、そして冗談半分で、魔塔研究所で働かないかと勧誘してみたら思わぬ返事が返ってきた。
『時がきたら、貴族令嬢としての未来を捨てて、トラビア王国の魔塔研究所に勤めて新薬とポーションの研究を続けたい』
公爵令嬢としての人生を捨てて研究者として働き続けたいとは、変わり者だとは思ったが。

天才が変人ってのはよくある話だし、うちに来る研究員は皆訳ありの変人ばかりだから深くは考えなかった。

（あれからもう、六年か？　やっぱり幾ら訳ありでも、貴族令嬢が家族と離れて隣国へ来るなんて怖くなったのかね）

そんなことを考えながら研究所へ戻った時。

皆が騒いでいることに気がついた。

俺が六年前に描き、布をかけておいた召喚魔法陣から黄金の光が放たれ、突風が吹き荒れていたのだ。

（……まさか）

「おまえら！　目を閉じろ！」

「「!?」」

その場にいた研究員達は、俺の言うことを聞いて皆目を閉じる。

もっとも、魔法陣は一層強い光を放ち始め、目を開けているのが難しいほどだ。俺の指示がなくとも、皆目を開けていられなかっただろう。

暫くすると、強い光は粒状に変化して中心に集まり、人の姿をかたどってゆく。

そこには、美しく白い女体が一糸纏わぬ姿で宙に浮いていた。



「キレイ……」

そう感嘆の声を漏らしたのは、まだ幼いがその才能故に研究員となったモルト・ペルセウス。

彼は犬の獣人で好奇心旺盛。幼さ故にその好奇心が勝って目を開けてしまったんだろう。

（まぁ、六歳の子供だから良いか）

光がおさまると共に、宙に浮いた少女は地面にゆっくりと降りてくる。俺は脱いだ白衣で手早く少女の身体をくるむと、そのまま自分の両腕で受け止めた。

「……ったく。衣服は持ってこれねぇから、成長する前に来いと忠告したんだがな」

『魔塔研究所の一員になる際、母国であるセレイア王国で自分は死んだことにしておきたいのです。何か良い方法があれば良いのですが……』

少女を魔塔研究所に勧誘した際、俺は少女からそのような相談を受けた。

その時、誰にも気付かれず死んだように見せかける方法に一つだけ心当たりがあった俺は、その方法――逆召喚魔法を少女に伝えた。

彼女が今回使用した逆召喚魔法は俺が生み出したもの。本来、召喚魔法とは特定の人間を呼び寄せるものだが、逆召喚魔法はそれを応用している。

皆の見ている中、逆召喚魔法を己にかけて、既定の召喚用の魔法陣に自分自身を召喚するのだ。逆召喚魔法を自分にかけた時の身体の消え方は、消滅魔法を自分にかけた時の消え方と同じなのだ。

逆召喚魔法を知らない者の目には、自殺のために消滅魔法を使ったようにしか見えない。

「あの～、室長、その少女は？」

光が消えた室内で、研究員の一人が恐る恐るといった様子で聞いてきた。

「後で紹介する。俺は今日用事が出来たから、おまえらはここを片付けておけよ。ガキ……モルトだけ俺についてこい」

風が吹き荒れたことによって倒れた機材や、散乱している書類の束を視線で示す。

研究員達は、そんなことよりも今起きた出来事に対する好奇心を追求したい様子だったが、後で室長である俺が説明すると言うと、不満げな顔をしながらも「はい……」と頷いた。

「やった！　ボク、ついてって良いの？」

俺が抱えている少女を興味津々とばかりにガン見していたモルトは、耳をピンっと立てると、満面の笑みを浮かべ、尻尾をパタパタさせて喜びをあらわす。



研究所を出ていく俺の後を、モルトは散歩を喜ぶ犬のように意気揚々としながら急ぎ足でついてきた。

◆

とある公爵令嬢がトラビア王国に来てから少しの時間が経過した。

突如現れた若き天才は、表に顔を出すこともなくただただ己の才を発揮していった。

トラビア王国の民何万人もの命を病魔から救う新薬を作成した功績を讃えられ、身元不明ではあるが、トラビア王国の戸籍と男爵位を王家から叙されることとなる。

――彼女の名前はリディア・ホーキンス。

それからも彼女は、新薬及びポーションの研究に尽力し数多の功績を重ねた。

そして、四年の歳月が流れた頃――

リディアは、自身が所属する研究所の室長から、とある打診を受けることとなった。

その一言で、再び運命を揺り動かされるとは知らずに……

「おまえ、今なら奴隷を購入出来るくらいの金があるだろ。そんなに研究に没頭したいなら買ってこいよ」

「……？」

◆

数年前、私、リディア・ホーキンスは元セレイア王国の公爵令嬢だった。

貴族令嬢らしく学園生活を送っていたが、事情があり、生家である公爵家と祖国、婚約者を捨て、一人隣国トラビア王国へと渡ったのだ。

その後、私は兼ねてから勧誘を受けていたトラビア王国の天才が集う研究所に行った。

前世では特段天才というわけでもなかったけれど、科学水準がこの世界より成熟していた文明から来た私が作る薬は重宝（ちょうほう）されている。

後ろ盾など何もない私であったが、いつの間にか天才扱いを受けるようになった。

取得した特許（とっきょ）から得る収入と、お偉い方からの注文に応えて作る薬やポーションの収入。

この生活を維持すれば良いと心の片隅に思い始めた今日この頃。



何でもないことのように奴隷を勧めてくる室長のアドバイスを聞いて、一瞬この人は人でなしなのではないだろうかと疑念を抱いた。

だが実際、この国で裕福な層は殆どが奴隷を購入し、共に生活をしている。

とはいえ、室長をはじめリディアと同じ階で働いている職員は奴隷文化に馴染（なじ）みのない異国民が多いからなのか、奴隷を保持している者は少ない。

それでも、室長がリディアに奴隷購入を勧めてきたのは、短期的な人員不足により連続勤務で働き詰めになっている自分への配慮であることは明らかだった。

完全な親切心での配慮ではなく、業務の効率を考えてのことだというのは、四年間共に働いてきたのですぐにわかったけれど。

あれから四年も経った今、私からは王太子と婚約者だった頃の面影（おもかげ）など消えたと思う。

現在の私は研究員として、研究室に数日間こもり続けることも多い。

家で出来る研究を持ち帰ることもざらにあって、小部屋には本や資料が散乱している。

世俗（せぞく）に疎くなり、たまにお風呂にも入り忘れるほど、研究に没頭することもある。

――数年前、公爵令嬢だった頃だと考えられない話だ。

収入は充分あるから、本当は定時で上がっても何ら生活は困らない。
だからと言って、今世の私は別に研究が好きなのではない。
ただ不意に過去を思い返さないためだ。忙しくしていることで気が紛れ、おかげで一度も過去に捨てたものを振り返らずに前を向いてこられた。
あと少しの間だけ、研究に集中することは私に必要なことだと感じている。
そんな私は現在、室長に勧めていただいた奴隷商を訪れていた。
正直――前世では平和な国でのほほんと生きてきて、祖国では奴隷の売買が禁止されていたので、奴隷そのものに抵抗がないわけではないのだけれど、それでもここへ来たのには理由がある。
私は元々家事が苦手だ。その上、爵位を得てから任される仕事量も格段に増えてきた。任された仕事は何であろうと、全て自分でやり遂げるつもりだ。
つまり今後私は研究に意識を全て注ぐ。
だから代わりに家事全般をやってくれる奴隷を買いに来た……いや、買うことを検討しに来た（実はまだちょっと響きが怖い）。
嫌なら奴隷なんて物騒なものを買わないで、人を雇えば良いじゃないかって？
……確かに、嫌だ。奴隷というのは人の命を人が所有物として自由に使役し人格を認



めない制度だと私は認識している。
そんなのは嫌だし許せない、間違っていると、考えていた。
だから私は室長から奴隷購入の打診を受けた時、室長を〝人でなし〟だなと思った。
だけど、その後室長に言われた言葉で納得してしまった自分がいた。
『研究に全てをかけられる状態にするなら、必要な人材は自分の全てを託しても大丈夫だと思える者だ。奴隷契約している奴よりおまえが信用出来る者が他にいるのか？』
奴隷となった者は主人の命令したことに逆らえず、裏切れないよう購入時に隷属契約を結ばされるらしい。それを聞いて確かに、それ以上に私が自分のことを全て託せる人間関係があるだろうかと思ってしまった。
（……研究ばかりしていて気付かなかった。私はいつの間にこんなにも人を信用出来ず、身勝手になってしまったのかしら）
いつの間にか奴隷購入に理解を示せるようになった自分に嫌悪感が湧く。
そのことに酷くショックを受けている私を知ってか知らずか、モルトがこう言った。
『ボクも最初は奴隷として室長に買われたんだよ！　だけど、奴隷の仕事より研究員の方が向いてるからって、今は研究員になったから幸せだよ！』
その言葉を聞いて、奴隷は一生奴隷でいなくてはいけないわけではないと知り、ホッ

と胸を撫で下ろした。それなら、私のところに勤めてもらって、本人が嫌だと言ったら解放してあげれば良いのかもしれない。

とはいえ私が認識しているのと、実情は全然違うのかもしれないとも思い、まずは少しだけ見学しに来たのだ。

外套を身に纏い、フードを深く被り奴隷市場に足を踏み入れた。

そうして目に入ってきたのは――悪い意味で想像通りの光景だった。

奴隷の皆の瞳に光はなく、檻の中で鎖に繋がれて恨めしそうにこちらを見ていたり、若しくは俯いて蹲っていたり。要するに良い光景は広がっていない。

私が室長お勧めの奴隷商の前で足踏みをしていると、毛先がグルグルしている髭を生やした身なりの良い男の人に声をかけられた。

どうやら奴隷商の店員さんらしい。彼の勧めで、お店に入ることになった。

「お初にお目にかかります。お客様は奴隷の購入をご検討ということでよろしいですね？」

「あ……は、はい」

「予算はどのくらいですか？」

予算……幾らあれば良いかわからないけれど、袋を広げて手持ちのお金を見せる。



「このくらいで、足りますか？」

「えぇ、これくらいなら状態の良いものをご用意出来ますよ。どのような奴隷を御所望で？」

「とりあえず……私の生活面を全面的に色々サポートしても苦痛にならなさそうな……そんな虫の良い人はいませんよね？」

「ふんふん、全面的に色々とサポートですね！　お美しいお客様にわたくしめ、今回はサービスさせていただきまして本来よりグレードをあげてご案内いたします。どうぞついてきてくださいね～」

案内されてゆく道の途中には、多種多様な種族が檻の中に入っていた。

鞭を打たれた痕が服の隙間から見えていたり、痩せこけていたり、檻の端っこで蹲っている子供の姿も見える。

「あの、彼らはちゃんとご飯を食べているのですか？」

「あぁ、与えていますが食べませんねぇ。そこにいるのは返品されてきたものばかりです。値段もその分安いですし、子供ですから購入される方もいますよ。お客様はどういたし……」

「――やっぱり、結構です。もう帰ります。すみませんでした」

深々と頭を下げる私に、奴隷商の店員は慌てふためいた。
「申し訳ございません、何かご不快でしたか？　これでも定期的に洗ってはいるのですが……。綺麗好きなご令嬢には大変お目汚しでしたね。そうそう！　お客様にご提示いただいた金額から余裕を見て買うとすると、この辺りの奴隷はいかがでしょう？　少し傷ものですが、力も体力もありますし、家事手伝いから荷物持ち等と何の問題もありません」
そうは言われても、足を踏み入れてすぐ、自分がここにいること自体が間違いだと気がついてしまったのだ。
室長の言うことには一理あるかもと思ってきたけれど、間違いだったらしい。
フードの端を掴んで引っ張り、表情が見えないよう顔を埋めて、踵を返そうとしたその時。
道の先にある一室から女性の大きな歓声が聞こえてきた。
「まぁ、こんな上物は初めてじゃない？　お店ではなく、私専属の男娼（だんしょう）にしようかしらぁ」
「気に入っていただけて良かったです。ですが、少々……夜の寝つきが悪いのと、精神的に不安定なところがありますが」



「少し寝つきが悪くても、奉仕は出来るでしょう？　即決よ！　この見た目だもの。使い道は幾らでもあるわ。珍しいサファイアの瞳に汚れていても美しい白金の髪。女を惑わせる甘いフェイスも全て気に入ったわ！」
（サファイアの瞳？　青い瞳は別段珍しくもないけれど……サファイアのように美しいとなると……まさか？　……ね？）
私はこの時――そんなはずないと思うのに、なぜかある人物が脳裏をかすめていた。
後ろから私を案内していた奴隷商人が止める声も聞かず、隣の部屋に続く扉を開いた。
――見なければ良かったと後悔するというのに。
不躾に確認もなく突然部屋の中に入ってきた私を、先程まで感嘆の声を上げていた女性が訝しむように睨むのも目に入らず、その横に並び立つ。
そして、目の前で檻の中に入っているのが、脳裏に過った人物であることをすぐに確信した。
数年前、私が母国セレイア王国に捨ててきたはずのもの。
「なぜ……こんなところに」

彼は、奴隷商人に顎を掴まれ、無理やり顔を上げさせられている。
着ている衣服は通常の奴隷服とは違い、元はそれなりに立派な生地だろうが、所々破れ着崩れていた。
数年前より心なしか痩せて、目元にうっすらクマがある。虚ろだけれど美しさを損なうことのないサファイアの瞳と目が合った瞬間。相手からも動揺の色が見て取れた。
他人の空似ではないことを理解した私は、思わずヒュッと喉を鳴らす。
両膝を地面へつかされ、首と手に繋がれた鎖を檻に繋ぎとめられているのは……
「――バン……」
どうして、彼がここに。
母国で一体、何が起こっているの？
何を間違ってメインヒーローが奴隷落ちエンドを迎えているのだろう。
そういうルートがゲームにあったのかは思い出せないが、現実問題、王太子がこのような状態に至るなどあり得るのだろうか。
いや、それでも彼はゲーム運営会社の手厚い加護を背負うメインヒーローなのだから、最後は救われるはずだ。
たとえ今現在不遇な扱いを受けていても、いつか王宮の使者が迎えに来ると考えられる。



既に乙女ゲームの物語からリタイアした私が下手に手を出そうものなら、また悪役として君臨してしまうかもしれない。
アルレシス公爵令嬢は、四年前、この世から消滅した。
今ここにいるのは、しがない研究員のリディア・ホーキンスだ。
ホーキンス男爵に婚約者がいた過去はないし、隣国の王太子とも何の関わりもない。
だから、ここで私が関わる必要は一つもない。
そう自分に言い聞かせ踵を返そうとした時。
「……リディ……なのか？」
目の前にいる彼から小さく掠れた声で紡がれた私の名前が、あまりにも懐かしくて、足がその場から動かなくなった。
彼は幻を見ているように思っているのか、私の顔をちゃんと確認しようとしているのが、凝視してくる視線からわかる。
すると、その様子に先程感嘆の声を上げていた女性が困ったように言った。
「ふぅん。これからご主人様になる人間を前にして、他の女の名前を言うなんてねぇ。何だか妬けちゃうわ。ふふっ、まずはちゃんとしつけをしないとね」

常連の女性が舌舐めずりをしながら檻に繋がれている鎖を引く。
すると鎖の先にある首輪が引っ張られてバンリの顔が柵に近づいた。
この様子を見るに、購入は決定しているようでこれからR18ルートに突入することが想像出来る。
だけど、それでもいつか彼には王宮から迎えが来るはずだ……
（……本当に、王宮から迎えは来る？　悪役令嬢である私が断罪ルートを外れているのに〝絶対〟なんてことがあるのだろうか）
私は、彼の不幸を願っていたわけではない。
ただこの先、互いを傷つけず、良い思い出を持ち合わせたまま、幸せになれたのならそれで良いと思っていたのに。
どうして、今更こんな形で再会してしまったのだろう。
立ち止まっている私に、先程案内してくれた店員さんがやっと追いついてきて、後ろから話しかけてきた。
「お客様、急にいかがされましたか？」
「……この檻の中にいる人を解放するには、どうしたら良いですか？」
「え？」



店員さんは、私が突然何を言い出したのか理解が出来なかったようで瞬きを繰り返す。
すると、その場にいた女性が話しかけてきた。
「あらぁ、私からこの奴隷を横取りしようっていうの？」
「すみません。ですが、まだ購入は完了していないのですよね？」
「でも買うと決めたわ」
「では、私は貴女の提示するその倍額を払います。貴女にも、同じ額をお支払いします」
私が言った言葉に、女性は「あら？」と目を細める。
「貴女、見たところ貴族のお嬢様のようだけれど。こんなところで、そんなお金を使いすぎると、パパに怒られるわよ？」
「私に家族はいません。これは私の稼いだお金ですから、お気遣いされなくとも大丈夫です」
「ふぅん……」
舐めるような視線が、この身に焼き付いて刻み込まれるようだ。
この女性の目力に、冷や汗がだらだらと背中を伝う。蛇（へび）に睨まれたカエルの如く硬直していると、女性はペロリと舌舐めずりをしてこう言った。

「……良いわ。なかなか惜しい買い物だけれど、貴女に恩を売っておいた方が何だか良いことがありそうよね。お金回りも、客の紹介も、安価で安全な避妊薬調達についても……ね？」

「……。何で……」

顔をフードに引っ込めて隠そうとしているのが無駄であるかのように、女性は私の頬に手を添えた。

「あら、私の経営している娼館は色んなお客様がいらっしゃるのよ？　このお顔では、お話を聞いているだけで誰でもわかっちゃうわよ。勿論、私のところに貴女が勤めに来るのも大歓迎よ？　ふふっ」

◇

そんなわけで、私は予定にない奴隷を購入することになった。

奴隷を購入しようと考えたバチが当たったのだと、授業料だと考えて、奴隷商と女性にお金を支払う。暫くは質素な暮らしを余儀なくされそうなほどにお金がとんだ。

とにかく、バンリはあのような環境にいたので身体に悪いところがないか、精密検査



を受けてもらう必要がある。早速知り合いのお医者様の元へ向かって歩いているところだ。

（明日、奴隷契約の解除方法を室長やモルトに聞かないと……）

一歩後ろを歩いているはずのバンリの足音が聞こえず、ちゃんとついてきているか心配になり振り返った瞬間。強く風が吹いて被っていたフードが後ろに押し上げられた。

（まずい……）

隠していた銀色の髪とアメジストの瞳は市井で目立ちすぎるものだ。

アルレシス公爵家のみに受け継がれる貴族特有の容姿は一回見たら忘れないだろうし、こういうところで姿を晒すと変な輩に絡まれることも多い。

フードを被り直そうとしていると、目を見開いているバンリと目が合った。

やはり、先程は幻とでも思われていたのだろう。

（まぁ、死んだはずの人が現れて、自分を購入したら混乱するよね……）

そんなことを考えていると、案の定懸念していた変な輩がひょっこりと現れて急に声をかけてくる。

「ねぇ、君、珍しい髪色だね」

「俺達これから遊びに行くんだけど君も一緒にどう？」

「すみません、これから所用がありまして」
断り文句を言って、フードを被り直していると。
「あ、それ被っちゃうの？　せっかく綺麗なのに勿体ないよ……」
男が私の腕を掴もうとして手を伸ばしたその時……
バチバチッと、何かが炸裂した音と共に強く光りが弾けた。男の手と私の間に強い電気のようなものが流れたのだ。
思わず身体を縮こまらせて一瞬目を瞑るが、すぐに電気はなくなり恐る恐る瞼を開く。
（え、今の何？　静電気？）
どうやら、強い静電気が偶然起きたようだ。
男はかなり痛かったのか「痛い！」と叫びながら手を抱えてその場に蹲っていた。
（今のうちにこの場から離れよう）
私が駆け出したすぐ後ろを、バンリがついてきていることを確認し、歩みを進める。
そうしているうちに、無事知り合いの病院に着いたのでバンリを預けた。
精密検査には三日ほどかかるということだった。
その間に、奴隷契約の解除方法を聞いておけば良いと、この時の私は安易に考えていた。



◇

私の母国であるセレイア王国という国は、大きくも小さくもない平凡な国だった。
国土も人口も資源も技術も経済も、大国であるトラビア王国には敵わないけれど、トラビア王国とは違い人身売買は違法とされており、奴隷商人は取り締まられていた。
民も貴族も皆信心深くて平穏を好み、長きに亘り代々賢王の治世であったおかげか、同規模の諸外国と比べ平和だった。
それなのに昨日、セレイア王国の王太子がなぜか奴隷になって隣国であるトラビア王国にいた。
（……明日は休みだし、図書館に新聞でも読みに行こうかな。何かわかるかもしれない）
「リーちゃん！　どうしたの？　すっごく寝不足って目をしてる！」
クリクリした目で私を覗き込んでくるモルトに癒されながらも、彼に聞かなければならないことを思い出した。
「ねぇ、モルト、奴隷契約の解除ってどうすれば良いの？」

「それって本当は違法だから、人に言っちゃダメって室長に言われてるの！」
「そこを何とか……なりませんかね？　あ、そうだ。今度モルトの好きなキャッチボールしようよ」
「んー……」
モルトは微妙な顔をしている。〝あ、これ教えてもらえないやつだ〟と今までの付き合いでわかった。どうやらキャッチボールでは釣り合わない情報らしい。違法な情報というわけだから当たり前だけど。
「じゃあモルトの言うことを一つだけ、何でも聞くよ！」
私がこう言った瞬間、モルトは目をキラキラさせて、まだ幼さの残る両手をグッと握り込む。
「ホント!?　やったぁ！　じゃあボクの新作のポーションを試して良い？」
モルトの返答に、私は途端に無言になった。
モルトの言っている『試して良い？』の意味は、私の身体で人体実験をしたいということだ。
私は三年前、天才といえども七歳児と彼が作っている薬の効果を侮って、人体実験に了承してしまったことがある。



それから、もう二度とモルトの人体実験に付き合わないことにしていた。
「……」
「大丈夫だよ！　前も言ったけどボクの作るものは、痛くないし、むしろ女の人には大人気なんだよ！　どのくらい効果あるか知りたいだけなんだ、身体に害はないよ！」
お偉い人から研究所への研究依頼ではモルトが指名されることが多い。
モルトの専攻している研究は、人の三大欲求の一つである〝色欲〟を満たすのに大変優れているからだ。彼が作り出す薬やポーションは、時に卑猥な効果を生み出す。
その効果は絶大で……
だから、欲深い人ほどモルトが研究し作成したものを使い、快楽に溺れてゆく。そしてその存在に依存し、資金援助し、頭が上がらなくなり、深みにはまりさらに快楽を欲して崇め跪く。
純粋で、可愛らしい癒し系の子供にしか見えない彼だというのに、ある意味一番怖い存在だと私は思っている。
「……」
「おかしいなぁ、皆は喜んでくれるのに、何でリーちゃんは喜んでくれないんだろう……。あの時室長は『リディアは満足してた』って言ってたの……モガッ」

立ち読みサンプルはここまで